

浦賀文化

怒田城址

平安時代の末期、二十年にわたり伊豆に幽閉されていた源頼朝が、治承四年(一一八〇年)平氏討伐に失敗して安房国へ敗走しました。そのとき、これに従った三浦一族の居城「怒田城」とは…。

怒田城は、京浜急行の京急久里浜駅から北久里浜方面へ向かう線路が、山際の削り取った土手にさしかかる台地の上にありました。現在、その近くに変電所があります。この変電所を建てる際の工事や線路を敷いたことから、もとの地形とは異なった姿になりました。

この場所は吉井の城山と呼ばれたり、山の上部が台のように平らになっているため台崎と呼ばれたりもしていました。近くには「沼田」とか「舟倉」という地名も残っており、『源平盛衰記』にもその名が見えます。こうした自然の地形を利用した城は中世以前の山城として知られており、怒田城は、近くの佐原城、衣笠城などととも、平安時代末期に三浦半島一帯を治めていた三浦一族の拠点となる代表的な城のひとつです。この城は海を隔てて安房に近いことや、舟の倉庫を意味する

「舟倉」などの地名から三浦一族が抱えていた「水軍」の本拠地になっていたのではないかと言われています。怒田城の城主については明らかではありませんが、はじめ三浦大介義明の弟・岡崎義実がおり、のちに義実が平塚と厚木の中間に位置する岡崎城に移ったあと、杉本太郎義宗(義明の長男)がいたのではないかと見られています。

* * *

治承四年(一一八〇年)、現在の小田原市内に位置する石橋山の合戦から三日後の八月二十六日、衣笠城は畠山重忠や河越重頼ら平家の軍勢に攻め込まれます。しかし三浦大介義明は一人で城を守り、次男の三浦義澄(義明の後継者)らを怒田城へ逃れさせました。

このときに、最後まで名誉を大切にしようとする義明と、現実を重く見た孫の和田義盛の好対照な意見が『源平盛衰記』に

伝えられています。

義明 敵は必ず明日攻めて来るだろう。衣笠城に引きこもって軍せよ。

義盛 衣笠は馬の足立ちよき所だから、寄り手のために都合がいい。すぐに追い落とされる。それに引き換え、怒田の城は、三方、石山が高く、馬がとおりにくい所である。

義明 怒田といえばわずかの土地にすぎない、衣笠こそ名の聞こえたる名城だ。三浦のものどもは、衣笠に引きこもって散々に戦って討ち死にしたといえ、ああ、天下の名城だ、と人も言うだろう。怒田で討ち死にといえ、怒田とはどこだ、聞いたこともない、と言われるのは面目ない。恥だ。

こうした議論が交わされたものもつかの間、義明は衣笠城に残り四五〇騎で防戦したものの、三千騎ともいわれる平家の大軍に討ちとられ、城は陥落してしまいました。

義明の命令で怒田城へ逃れた義澄ら三浦一族の軍勢は、真鶴の海岸から安房国へ脱出した頼

朝の一行と合流します。その後、頼朝一行は三浦義澄らの先導により、房総半島を上していきます。下総国(千葉県北部)と武蔵国の境にある隅田川を渡り、南下して相模国鎌倉に入りました。この途中、衣笠城を攻撃した畠山氏や江戸氏、河越氏らの平家軍を従え、最終的には三万もの大軍になったといえます。

石橋山の合戦後に房総へ敗走するまでに残されたエピソードをひとつご紹介しましょう。和田義盛は、頼朝による全国支配が成功したら、自分に武士の最高の地位を与えて欲しいと願いました。これに対して、頼朝は義盛の願いを約束したといえます。事実、義盛は鎌倉幕府で将軍に次ぐ重職である侍所の筆頭(別当)になりました。(芳賀久雄)



三浦半島城郭史より

★参考文献

『横須賀こども風土記』



歴史 語りい座・浦賀 四十三

郷土史家 山本 詔一



●『近世浦賀畸人伝』Ⅶ●

一僧 素運そうん

素運は東浦賀にある日蓮宗・東耀山頭正寺の十五代目の住職で法号を日輝といった。

生まれた所は総州中村郷と記されているが、中村郷があったのは奈良時代の話であり、江戸時代は匝瑳郡中村で、現在は成田空港に近い千葉県香取郡多古町中村であろう。

人格はもちろん、学識も豊かで日蓮宗のなかでもよく知られた人物であった。

幼い時から法華経を学ぼうという志をもっていたので、日蓮宗の六大本山の一つである中山（現千葉県市川市）の法華経寺で戒律を学び、さらに法華経を会得するための激烈な極める苦行の修行を行った。それでいて、周囲の人々や同じ宗門の人、宗旨は違っても気心を通じ合う、豊かな感性を持っていた。

一方、義侠心も強く、争いごとがあるや危険を顧みず、飛び込んでいき仲裁をする。こうした行動に皆従わざるを得なくなり、肝の据わった人であると賞賛した。

ある年、一念発起することがあって江戸へ出て、宗門の弊風をただし、

僧侶の眼を開かせようとした。しかし、残念ながら病気になる、浦賀へ戻り帰らぬ人となった。享年四十九才であった。

素運が一年発起した出来事とは何であったのであろうか。蜀山人太田南畝が著した『二話一言』に江戸谷中の日蓮宗延命院の住職日道が数人の女性との関係が発覚して、死刑になる事件が起きている。この事件は日道の単独ではなく、かなり多くの人々が関わっており、多くの人が処罰された。この事件が起きたのは享和三年（一八〇三）のことであるから、こうした宗門のタガの緩んだ状況にしばれを切らしての行動であったのかも知れない。

素運は頭正寺の本堂を再建したところなどの功績から「中興開基」と頭正寺にある墓石に刻まれている。

一僧 深本しんほん

深本は俗名を半五郎といい、若いころ袁耽「中国の東晋（三一七）四二〇）のころに活躍した賭博の名人」にあこがれ、任侠豪雄の世界では知られた存在であった。その後、江戸屋という遊廓を開くが、ここは何もかも贅を尽くしたものであった。

ある年、江戸で遊んでいると何か前世からの因縁であろうか、高貴な

僧侶の教えを受けた。それは、「歲月は人を待たず、人の死は思っているより早く来る」ということであった。

江戸屋半五郎の口伝に、『浦賀奉行の初鹿野伝右衛門が市中を視察しているとき、極めて華美で大きな建物を目にした。お供の役人にこの建物のことを尋ねると、「洗濯屋」との答え、「洗濯屋がかような華美である必要がない」と取り壊しが命ぜられた。』とある。この事件から自分自身のことや仕事のことなどを見直す意味で、江戸へ出掛け、そこで高僧（目黒・祐天寺の六世祐全上人といわれる）の教えをうけた。浦賀へ戻って来ると勤めていた芸妓や遊女たちをそれぞれの土地へ帰し、遊廓の建物などは売却してお金に換え、所縁ある人に世俗の名残の品として整え、配り分けた。そして、自分は僧侶になるための準備をして、京都の黒谷の金戒光明寺で剃髪し、墨染めの衣をまとい、名も深心と改めた。

（次号に続く）

*義侠：強きをくじき弱きを助けること
*弊風：悪い風習



笑話 一題

河口湖を去年の十月にスタート。富士五湖や忍野八海・三島大社・時の栖・駿河湾・白糸の滝・樹海・富岳風穴等を巡り、今年の九月に河口湖にゴール。
大好きな富士山の麓を月に一回14〜20キロ歩き、12か月かけて一周しました。快晴に恵まれた日には間近に富士山を見ながら、雨の日には雨具を着た集団の長い列です。
歩き始めた頃は、月に一日くらいはと気楽に考えていたのですが、一年を通してその日に合わせるには予想以上に大変で、河口湖にゴールした時は爽快な気分でした。
これからは、良かったところ、雲が多くて富士山が見えなかったところを快晴の日に分のペースで歩いてみようかと思っています。そしてもうひとつ。
まだ富士山に登っていないけれど、これをどうしようかと思索中。
考えているうちに、益々年を重ねてしまいましたが・・・
（パインの恵み）



俳句の散歩道

| | |
|----------------------|------------------------|
| 勝海舟断食跡とや山笑う 新田 和江 | 笛の音の揃うコミセン風涼し 田島清一郎 |
|----------------------|------------------------|

浦賀コミュニティセンター分館から ☆お知らせ☆

浦賀に因んだ俳句を募集しています。（自由句も可）
投句箱・投句用紙は、当館の玄関にあります。ご投句お待ちしております。



当館の玄関に掲示中！